神道・日本文化研究の新しい地平へ

企画・編集委員会代表 阪本 是丸

本号は、学界・論壇の第一線で活躍する内外研究者および会員による、論文十九編をはじめ研究ノート・資料紹介・誌上講演・随想・書評・文献翻刻などを収録し、再発会以降比類のないバラエティ豊かな内容となった。前身の財団法人明治聖徳記念学会における最大の功労者・加藤玄智博士の逝去四十年を記念するに相応しい企画であり、かねて当委員会が機関誌の改善について検討を重ねてきた成果でもある。特集の趣旨に賛同して力作をお寄せいただいた諸氏に心より御礼を申し上げる。

近代日本研究の嚆矢については種々の説があるろうが、アカデミズムの「普通に歴史の研究範囲を五十年前とする考」え（黒板勝美『国史の研究』）を乗り越えるべく近代史研究を企てた、吉野作造ら民間研究者の明治文化研究会の創立（大正十三年）に「黎明」を求めると考え（鹿野政直他『民間学事典 事項編』）は首肯できよう。そして同じく国内アカデミズムに先駆けて、日本アジア協会やB・H・チェンバレンら欧米人の日本研究に刺激を受け、神道を含む近代の日本文化へのアプローチを試みた民間有

志のグループ・明治聖徳記念学会の存在も、『日本文化史論纂』や『明治天皇聖徳余光』の刊行など、当時の日本文化史研究の水準を示す業績とともに再評価されて良いと思う（拙著『近代の神社神道』）。『明治文化全集』編輯同人でもあった長谷川如是閑いわく、アジア大陸の諸文化を受容してきた日本において、近代に「それを捨て去つて一先づ白紙の日本に帰るために、古神道といふ非文化主義の起つたのも意義あることだ。がそんな風に白紙になつたのは、……欧米大陸の文化の影響をうけるための準備であつた」（『経済往来』二一七、昭和二年）。私も近現代日本の文化変容のルーツに関心を抱き、それが少なくとも近世に遡ることを神道史・国学の立場から探求してきた一人であり（例えば本誌四十一号所収「神仏分離・廃仏毀釈の背景について」、本号の諸論考には先覚の視座を発展させ、あるいはそれを凌駕して新しい地平を開拓するための示唆が数多く含まれている）。

前号までの「特集 近世・近代の国学」、「日露戦争百年周年記念特集（一）（二）」の問題意識を継承し、さらには終戦六十周年の節目を契機として、意義深い特集号が編まれたことを会員各位とともに慶び、次号でも充実した成果が公表できるよう、共々に努めたい次第である。

（國學院大學教授・研究開発推進センター長）